

The Japanese Parenting Style Scaleの妥当性・信頼性の追加検証

— 「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトデータを使用して—

発達保育実践政策学センター 大久保 圭 介
教育心理学コース 遠 藤 利 彦
発達保育実践政策学センター 野 澤 祥 子

Additional examination of the validity and reliability of The Japanese Parenting Style Scale

— Analyzing the longitudinal data from a joint research project of CEDEP and Benesse Educational Research and Development Institute —

Keisuke OKUBO, Sachiko NOZAWA, Toshihiko ENDO

In this study, the validity and reliability of the JPSS were examined again using the longitudinal data from a new sample. Approximately the same level of factor structure validity as the original study was shown, but some issues were found regarding the consistency of items for Permissive factors. In addition, the correlations of the SDQ scale with two subscales, Hostility and Harsh control, showed different results from those in Okubo et al. (2022). The present study also showed longitudinal correlations (test-retest reliability) of the scales, which were not examined in the original paper.

目 次

1. 問題と目的
2. 方法
 - A. データセットについて
 - B. 分析に使用した変数
 1. Japanese Parenting Style Scale
 2. The Strength and Difficulty Questionnaire (SDQ)
 3. デモグラフィック項目
 - C. 分析方法
3. 結果
 - A. 3時点のCFAの結果
 - B. 下位尺度ごとの記述統計
 - C. 下位尺度ごとの縦断的関連
 - D. JPSSとSDQ, およびデモグラフィック変数との相関
 - E. 因子構造に関する探索的な分析
4. 考察
 - A. 因子構造について
 - B. 基準関連妥当性について
 - C. 縦断的な相関について
 - D. まとめと今後の課題

1. 問題と目的

本論では、縦断データを使用し、Japanese Parenting Style Scale (Okubo et al., 2022)¹⁾の妥当性と信頼性を再度検証することを目的とする。元々、本尺度は英語の論文として刊行されているが、今後、日本での調査や実践における幅広い活用を促すために、日本語で本尺度について論じておくことも重要であると考えられる。

Japanese Parenting Style Scale (以下、JPSS とする) は、幼児期の子どもをもつ保護者の養育スタイルを測定するための尺度である。養育スタイルやその類似構成概念の個人差の測定を意図している日本語の尺度には、井 澗 (2010)²⁾、伊 藤 ほか (2014)³⁾、野 寄・齋 藤 (2022)⁴⁾ などがある。そのなかで、1). 養育スタイルの分類に関するメタ分析 (Kawabata et al., 2011; Hurley et al., 2014)^{5), 6)} に基づいて項目を作成しており、先行研究との整合性が高い、2). 日本人かつ子育ての経験がある研究者によって項目の作成・確認が行われたため、翻訳版の尺度で生じる項目の不適合感が少なく、比較的読んで理解しやすい項目になっている、3). 代表的な4つの下位尺度を測定することができる尺度としては、合計の項目数が少ないため (28項目)、回答者の負担も小さく、簡便に使用することができる、4). 父親・母親問わず使用できる、5). 誰でも無料で使

用することができる、などの特徴をJPSSは有している。JPSSの日本語項目は、Table 1の通りであり、論文掲載ページのSupplementary Informationからダウンロードすることができる (<https://www.nature.com/articles/s41598-022-23153-5>)。

Okubo et al. (2022) では、2つの調査の分析によって、因子構造の妥当性、尺度の下位因子のまとまり(信頼性係数)、他の変数との関連(基準関連妥当性)が検討されている。しかし、その2つの調査は、オンライン調査会社のモニターサンプルを対象としたものであり、回答者はオンライン上で回答しているという

特徴がある。当該尺度の汎用性を確認するためにも、別のサンプルで上記の妥当性や信頼性を確認しておくことが重要である。また、Okubo et al. (2022) では、再検査信頼性など、尺度の時間的な安定性については全く検討できていない。本論では、縦断データを使用することで、時間的な安定性について検討することも目的とする。

Table 1. JPSSの28項目

Item 1	時間があるときは、子どもと一緒に遊ぶようにしている。
Item 2	子どもに対して、自分から積極的に話をする。
Item 3	子どもとスキンシップを進んでとっている。
Item 4	子どもが自分に何でも話してくれるように接している。
Item 5	子どもが泣いているときでも、落ち着いて、子どもが何を思っているかを気にかける。
Item 6	子どもが泣いたり喜んだりしているときは、同じ気持ちになって寄り添う。
Item 7	なるべく、子どもと一緒に過ごす時間を十分にとっている。
Item 8	子どもが落ち込んでいるときは、できる限りそばにいる。
Item 9	時間があるときは、なるべく子どものそばにいるようにする。
Item 10	子どもの言動に対して、怒ってしまうことがよくある。
Item 11	子どもに、つい命令口調で物事を伝えることがある。
Item 12	子どもの振る舞いにイライラすることがある。
Item 13	子どもに腹が立ったときに、わざと意地悪なことを言うことがある。
Item 14	子どもに自分のストレスや怒りをぶつけてしまうことがある。
Item 15	子どもにイライラして、攻撃的に接することがある。
Item 16	他の子どもと一緒にいるときに、自分の子どもを特別扱いすることがある。
Item 17	子どもが同じ問題を起こしても、怒ったり怒らなかつたりすることがある。
Item 18	子どもが何かに取り組んでいるとき、つい手助けすることがある。
Item 19	子どもが言うことを聞かないときは、諦めて子どもの言う通りにする。
Item 20	子どもが泣いたり怒ったりしたら、子どもの言うことを聞いてしまう。
Item 21	子どもが何か間違ったことをしても、怒ることなく許す。
Item 22	子どもが失敗したときは、「私/僕が悪いんだ」と子どもに思わせるようにしかる。
Item 23	子どもが泣いているときは、早く泣き止むよう言い聞かせる。
Item 24	子どものしつけは細かいところまで行き届くように徹底している。
Item 25	子どもが失敗しても、甘やかすようなことは言わない。
Item 26	子どもがルールを破ったら、理由に関わらず、厳しくしかる。
Item 27	子どもが決まりを破ったときは、次からは守るように何度も言い聞かせる。
Item 28	子どもにできないことがあったら、できるようになるまで何度もやらせている。

2. 方法

A. データセットについて

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターとベネッセ教育総合研究所の共同研究として2017年から実施している「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトの縦断データを使用する。同プロジェクトは、全国に住む保護者のペアに対して、子どもが0歳から1歳の2017年より（平均月齢=11.51, 最低月齢=6, 最高月齢=17。以下、1時点目、もしくは0歳時点とする）、年に一度の質問紙調査を縦断的に行っているものである。2022年9月現在で6時点目まで実施が終わっている。本プロジェクトでは、子どもが幼児期にあたる4-6時点目にJPSSの回答を得ている。本論では、6時点目までの縦断データが揃っている1134組の保護者ペアのデータを中心に分析する。なお、6時点目の母親の平均年齢は38.31 ($SD=4.48$), 父親の平均年齢は40.19 ($SD=5.48$), であった。本プロジェクトは東京大学倫理審査専門委員会より承認を得ている (23-238)。

B. 分析に使用した変数

1. Japanese Parenting Style Scale

同プロジェクトにおいて4-6時点目に得られたJPSSの回答データを使用した。JPSSはWarmth, Hostility, Permissive, Harsh controlの4つの下位尺度から構成される。それぞれ9項目、6項目、6項目、7項目の合計28項目からなる。それぞれについて、4-6時点目の信頼性係数は、母親データについて、Warmth (4時点目: $\alpha=.87$, $\omega=.88$, 5時点目: $\alpha=.88$, $\omega=.88$, 6時点目: $\alpha=.88$, $\omega=.88$), Hostility (4時点目: $\alpha=.85$, $\omega=.85$, 5時点目: $\alpha=.85$, $\omega=.86$, 6時点目: $\alpha=.86$, $\omega=.87$), Permissive (4時点目: $\alpha=.65$, $\omega=.67$, 5時点目: $\alpha=.67$, $\omega=.70$, 6時点目: $\alpha=.64$, $\omega=.66$), Harsh control (4時点目: $\alpha=.68$, $\omega=.68$, 5時点目: $\alpha=.68$, $\omega=.68$, 6時点目: $\alpha=.70$, $\omega=.71$)であった。父親データについては、Warmth (4時点目: $\alpha=.89$, $\omega=.90$, 5時点目: $\alpha=.88$, $\omega=.88$, 6時点目: $\alpha=.88$, $\omega=.88$), Hostility (4時点目: $\alpha=.86$, $\omega=.86$, 5時点目: $\alpha=.86$, $\omega=.87$, 6時点目: $\alpha=.87$, $\omega=.87$), Permissive (4時点目: $\alpha=.66$, $\omega=.68$, 5時点目: $\alpha=.72$, $\omega=.73$, 6時点目: $\alpha=.71$, $\omega=.73$), Harsh control (4時点目: $\alpha=.73$, $\omega=.73$, 5時点目: $\alpha=.70$, $\omega=.70$, 6時点目: $\alpha=.72$, $\omega=.73$)であった。

それぞれの項目については、「1. まったくあてはまらない」、「2. あてはまらない」、「3. あまりあてはまらない」、「4. 少しあてはまる」、「5. あてはまる」、「6. 非常によくあてはまる」の6件法で回答を得た。本プロジェクトの調査では、「あなたは日頃、対象のお子様と（またはお子様に）以下のことをどれくらいしていますか」という教示文に続いて、項目を提示している。なお、元の調査の教示文は「以下は、普段のお子さんへの接し方についての項目です。それぞれの項目をよく読んで、「1. まったくあてはまらない」から「6. 非常によくあてはまる」までの6段階から最も適したものを選択してください。」という教示文を用いている。

2. The Strength and Difficulty Questionnaire (SDQ)

SDQ (Goodman, 1997)⁷⁾ は子どもの内在化・外在化問題の指標として、行為の問題、多動、情緒の問題、仲間関係の問題、向社会性の5つの側面を測定する尺度である。本プロジェクトでは、5時点目、6時点目にSDQについて、母親にのみ回答を求めている。それぞれの項目について、「0. あてはまらない」、「1. まああてはまる」、「2. あてはまる」の3件法で回答を得た。

3. デモグラフィック項目

Okubo et al. (2022) に合わせて、回答者の年齢、子どもの性別、世帯収入、加えて学歴に関する情報を分析に使用した。分析の際、世帯収入は間隔が等間隔になるよう、200万円ごとに区切り、1000-1500万円、1500-2000万円、2000万円以上を「1000万円以上」として統合した。最終学歴に関しても、専門学校と短期大学の回答データを統合し、5段階とした上で分析を行なった。

C. 分析方法

まず、4-6時点目それぞれの父母別回答データについて確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis, 以下CFAとする) を行なった。その後各下位因子について記述統計量や信頼性係数を算出した。そして、再検査信頼性の検討の一環として、各下位因子得点の時点間の相関を示した。最後に、基準関連妥当性について再検討するために、SDQやデモグラフィック変数との相関を示した。分析には、R (Version 4.3.0) を使用した。

3. 結果

回答別に Table 2 と Table 3 に示す。なお、項目番号は Table 1 と対応する。

A. 3 時点のCFAの結果

まず、元の尺度と同様の因子構造を仮定して4因子構造のCFAを行った。その結果を、母親回答、父親

B. 下位尺度ごとの記述統計

Okubo et al. (2022) で想定されている 4 因子について

Table 2. 母親回答の 4 - 6 時点目 JPSS の CFA の結果

	Time 4				Time 5				Time 6			
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
Item 1	.54				.57				.59			
Item 2	.63				.63				.56			
Item 3	.62				.65				.65			
Item 4	.67				.69				.68			
Item 5	.62				.56				.62			
Item 6	.70				.70				.69			
Item 7	.80				.81				.81			
Item 8	.76				.76				.79			
Item 9	.61				.65				.61			
Item 10		.81				.80				.80		
Item 11		.76				.77				.79		
Item 12		.71				.73				.76		
Item 13		.62				.63				.65		
Item 14		.69				.71				.69		
Item 15		.61				.60				.65		
Item 16			.22				.21				.18	
Item 17			.41				.41				.44	
Item 18			.34				.37				.36	
Item 19			.78				.81				.75	
Item 20			.79				.82				.77	
Item 21			.40				.44				.41	
Item 22				.45				.43				.46
Item 23				.53				.50				.61
Item 24				.37				.42				.42
Item 25				.63				.61				.68
Item 26				.42				.44				.37
Item 27				.58				.58				.54
Item 28				.35				.38				.36
CFI			.845				.840					.824
GFI			.991				.990					.988
RMSEA			.076				.083					.081

Table 3. 父親回答の4 - 6時点目JPSSのCFAの結果

	Time 4				Time 5				Time 6			
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
Item 1	.54				.53				.57			
Item 2	.74				.72				.73			
Item 3	.70				.68				.73			
Item 4	.63				.68				.67			
Item 5	.62				.65				.67			
Item 6	.74				.73				.76			
Item 7	.84				.84				.85			
Item 8	.80				.81				.82			
Item 9	.67				.71				.70			
Item 10		.80				.80				.82		
Item 11		.77				.79				.78		
Item 12		.73				.74				.76		
Item 13		.64				.66				.68		
Item 14		.71				.69				.72		
Item 15		.62				.64				.63		
Item 16			.29				.36				.38	
Item 17			.40				.44				.40	
Item 18			.47				.48				.49	
Item 19			.78				.77				.87	
Item 20			.75				.77				.75	
Item 21			.34				.48				.40	
Item 22				.47				.50				.49
Item 23				.57				.58				.55
Item 24				.51				.38				.52
Item 25				.65				.65				.64
Item 26				.37				.38				.39
Item 27				.61				.52				.62
Item 28				.52				.41				.44
CFI			.841				.827					.836
GFI			.983				.982					.979
RMSEA			.085				.091					.094

て、それぞれの項目の得点を平均し、尺度得点化を行った。4つの下位尺度それぞれについて、母親、父親回答別に、4 - 6時点目の記述統計量をTable 4に示す。母親、父親それぞれの回答について、下位尺度レベルで天井効果、および床効果を示しているものは見られなかった。また、Skewness指標から、一部の

Permissive得点を除いて、全体的にわずかに高い得点に分布が偏っていることが示された。

C. 下位尺度ごとの縦断的関連

JPSSの4つの下位尺度について4 - 6時点目の時点間の相関を検討した。Warmthについて、4時点目

Table 4. 4 - 6 時点目のJPSSの記述統計量

		Mother				Father			
		Mean	SD	Skewness	Kurtosis	Mean	SD	Skewness	Kurtosis
Warmth	Time 4	4.80	0.59	-0.31	0.49	4.47	0.69	-0.28	0.41
	Time 5	4.82	0.60	-0.33	0.35	4.51	0.70	-0.28	0.36
	Time 6	4.79	0.61	-0.32	0.22	4.46	0.74	-0.35	0.71
Hostility	Time 4	3.81	0.84	-0.30	0.63	3.39	0.91	-0.19	-0.10
	Time 5	3.85	0.83	-0.37	0.69	3.44	0.92	-0.31	0.07
	Time 6	3.82	0.86	-0.36	0.55	3.47	0.94	-0.25	-0.03
Permissive	Time 4	3.04	0.61	-0.22	0.44	3.26	0.67	-0.23	0.41
	Time 5	2.94	0.64	0.07	0.66	3.19	0.71	-0.24	0.43
	Time 6	2.88	0.64	-0.05	0.05	3.15	0.70	-0.37	0.32
Harsh control	Time 4	3.47	0.60	-0.31	0.71	3.58	0.64	-0.26	0.89
	Time 5	3.48	0.60	-0.08	0.92	3.56	0.64	-0.11	0.74
	Time 6	3.45	0.62	-0.04	0.75	3.52	0.66	-0.18	0.96

と5時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .73$ 、父親で $ICC = .71$ 、5時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .76$ 、父親で $ICC = .69$ 、4時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .70$ 、父親で $ICC = .64$ であった。Hostilityについて、4時点目と5時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .72$ 、父親で $ICC = .72$ 、5時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .76$ 、父親で $ICC = .74$ 、4時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .69$ 、父親で $ICC = .66$ であった。Permissiveについて、4時点目と5時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .63$ 、父親で $ICC = .61$ 、5時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .65$ 、父親で $ICC = .61$ 、4時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .57$ 、父親で $ICC = .57$ であった。Harsh controlについて、4時点目と5時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .65$ 、父親で $ICC = .65$ 、5時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .66$ 、父親で $ICC = .63$ 、4時点目と6時点目の得点の級内相関は母親で $ICC = .60$ 、父親で $ICC = .59$ であった。

D. JPSSとSDQ, およびデモグラフィック変数との相関

SDQの5つの下位尺度、および親の年齢、子どもの性別、世帯収入、親の学歴との相関をTable 5、Table 6に示す。なお、本プロジェクトでは、4時点目にSDQを測定していなかったため、ここでは5時点目、6時

点目の同時点間の相関を示している。

E. 因子構造に関する探索的な分析

Okubo et al. (2022) では、CFAにおいて、想定している因子からの因子負荷量が.30以上であることを項目選択の基準の一つとしている。しかし、先に行ったCFAの結果、Item 16の因子負荷量が、特に母親ではかなり小さかった。また、信頼性係数を算出する過程においても、第三因子(Permissive)を構成する6項目について、Item 16を落とすことで、信頼性係数がやや向上することが示された(例えば、母親回答のものについて、4時点目では $\alpha = .65$ から.68に、5時点目では.67から.70に、6時点目では.64から.67に向上する)。また、因子構造を仮定せずに、探索的因子分析を行ったところ、各時点、父母それぞれの回答データについて、第2因子、第4因子から、最大で-.27程度、マイナスに負荷していることがわかった。上記のことを踏まえ、第3因子からItem 16を落とし、残りの5項目で尺度得点化した場合のSDQとの相関を算出してみた(Table 7)。その結果、元々よりも、わずかに相関係数が高くなる傾向が示された。

4. 考察

本論では、幼児の子どもがいる保護者に対する縦断調査のデータを使用して、JPSSという養育スタイルを測定する尺度の妥当性や信頼性について再検討を

Table 5. JPSSとSDQの相関

		Time 5				
		SDQ_CP	SDQ_ES	SDQ_HI	SDQ_PR	SDQ_PB
Mother	Warmth	-.17	-.01	-.23	-.14	.34
	Hostility	.36	.22	.26	.13	-.11
	Permissive	.11	.11	.11	.17	-.09
	Harsh control	.15	.11	.11	.03	.04
Father	Warmth	-.10	.01	-.08	-.04	.11
	Hostility	.22	.09	.15	.04	-.02
	Permissive	.08	.11	.07	.13	-.01
	Harsh control	.14	.05	.08	.04	.03
		Time 6				
		SDQ_CP	SDQ_ES	SDQ_HI	SDQ_PR	SDQ_PB
Mother	Warmth	-.21	-.09	-.23	-.18	.35
	Hostility	.35	.28	.32	.15	-.13
	Permissive	.14	.16	.15	.19	-.14
	Harsh control	.17	.13	.12	.09	.00
Father	Warmth	-.12	-.01	-.11	-.08	.13
	Hostility	.25	.08	.21	.03	-.08
	Permissive	.04	.11	.04	.12	-.07
	Harsh control	.12	.06	.10	.01	.02

注1. ボールド体は全て5%水準で有意であることを示す。CP=Conduct problems, ES=Emotional symptoms, HI=Hyperactivity/inattention, PR=Peer relationship problems, PB=Prosocial behavior.

Table 6. JPSSとデモグラフィック変数の相関

		Time 5			
		Parent age	Child gender	Income	Education
Mother	Warmth	-.02	-.04	.00	.02
	Hostility	-.03	-.03	-.01	.04
	Permissive	.04	.02	.03	.06
	Harsh control	.00	.00	-.04	-.05
Father	Warmth	-.06	-.01	.05	.07
	Hostility	-.11	-.08	.03	.01
	Permissive	.02	.01	-.06	-.05
	Harsh control	-.03	-.04	.01	-.05
		Time 6			
		Parent age	Child gender	Income	Education
Mother	Warmth	-.04	-.04	-.01	.00
	Hostility	-.03	-.05	.01	.04
	Permissive	.00	.04	-.01	.03
	Harsh control	-.06	.01	-.02	-.03
Father	Warmth	-.01	.02	.02	.03
	Hostility	-.11	-.09	.03	.02
	Permissive	.05	.04	.00	-.01
	Harsh control	-.02	-.06	-.02	-.02

Table 7. Permissive得点とSDQの相関の比較

		Time 5				
		SDQ_CP	SDQ_ES	SDQ_HI	SDQ_PR	SDQ_PB
Mother	Permissive	.11	.11	.11	.17	-.09
	Item 16 dropped	.14	.13	.15	.17	-.10
Father	Permissive	.08	.11	.07	.13	-.01
	Item 16 dropped	.10	.12	.08	.12	-.01
		Time 6				
		SDQ_CP	SDQ_ES	SDQ_HI	SDQ_PR	SDQ_PB
Mother	Permissive	.11	.11	.11	.17	-.09
	Item 16 dropped	.17	.18	.18	.19	-.15
Father	Permissive	.08	.11	.07	.13	-.01
	Item 16 dropped	.07	.13	.07	.13	-.07

行った。以下、その結果について、いくつかの観点から考察を行う。

A. 因子構造について

元の論文に従い、本研究でも4因子構造でCFAを行った。因子モデルの当てはまりに関する適合度指標は概ね良好な値を示した。元のOkubo et al. (2022)と同程度であった。ただし、先述したように、特に母親回答でItem 16の「他の子どもと一緒にいるときに、自分の子どもを特別扱いつけることがある。」という項目がPermissiveという因子にまとまっている他の項目とはやや性質が異なる可能性が示唆されたと言える。因子負荷量に関して言えば、元のデータの半分程度の値になっており、サンプルに依存して他の項目との関係性が変動しやすい項目と言えるかもしれない。確かに、子どもを他の子よりも特別扱いつけるというのは、甘やかすこと (indulgent) や緩さ (laxness) とはやや異なる次元なのかもしれない。SDQとの相関について、Item 16を落とした5項目でPermissive尺度得点を構成したものと、元々の6項目の尺度得点を比較すると、5項目の方がSDQとの相関がやや高かったことから、子どもの発達のアウトカムを予測するという点においては、当該項目を落とした方が有効である可能性がある。父親回答データでは、Item 16はそれほど極端に他の項目から浮いているわけではなく、許容できる高さの因子負荷量を示している。そのことも踏まえつつ、必要に応じてこの項目を除外することで、より子どもの発達との大きな関連をもつ下位尺度として使用することができるかもしれない。

B. 基準関連妥当性について

Okubo et al. (2022) で基準関連妥当性を検討するた

めの一つの指標として使用されているSDQについて、本プロジェクトでも回答を得ていたため、その比較のためにJPSSとSDQの相関を検討した。下位尺度のうち、HostilityもHarsh controlも元々はいずれも権威主義的な養育スタイル (Robinson et al., 2015)⁸⁾ に内包されると考えられていたものである。しかし、前者が情緒的な側面、後者が行動的な側面を指すものであり、別々の発達のアウトカムと関連することが考えられる。Okubo et al. (2022) では、SDQの向社会性得点とHostilityの相関が $r = -.02$ 、Harsh controlの相関が $r = .06$ と、後者が有意に小さい正の相関を示しており、わずかではあるがその差において、両者が弁別されていた。一方、本研究では、母親の向社会性得点とHostilityの相関の方が ($r = -.11$: 5時点目/ $-.13$: 6時点目)、Harsh controlとの相関よりも大きく ($r = -.04$: 5時点目/ $.00$: 6時点目)、元のデータとは異なる弁別の仕方を示した。元の論文では、男女回答を合わせたサンプルで相関が分析していることの影響もあるかもしれない。一応のところ、Okubo et al. (2020) では、保護者の共感性との関連やメンタルヘルスとの関連を持って、2つの次元は弁別されているが、子どもの発達のアウトカムとの関連においては、別の変数を使ってさらに検討していく必要があるだろう。

C. 縦断的な相関について

養育スタイル尺度の再検査信頼性について、例えば、Parenting Scale (Arnold et al., 1993)⁹⁾ の2週間の再検査信頼性は $r = .79-.84$ であることが報告されている。本研究ではJPSSについて、1年間、および2年間の級内相関を算出した。WarmthとHostilityは、いずれも級内相関が.70程度であり、通常再検査信頼性として検討される期間よりはかなり長い期間が空い

ている2時点間での相関にしては、比較的高い値なのではないかと言える。一方で、その二つと比べて、PermissiveとHarsh controlは、時点間の級内相関がわずかに低かった。このことは、これらの下位尺度は、先の2つの下位尺度よりも個人内で変動しやすいことを示唆する。養育スタイルの長期的な安定性についてはあまり知られていないとされることもあるが(Darling & Steinberg, 1993)¹⁰⁾、少なくとも子どもが幼児期の間の数年間においては比較的安定しているのではないかと考えられる。

D. まとめと今後の課題

本論では、先述したようにPermissive次元の一部において、項目のまとまりに関する課題を示したが、逆に言えば、それ以外については、新たなデータセットで因子分析を行っても頑健な因子構造を示したと言える。また、JPSSの下位尺度のうち、HostilityとHarsh controlについては、SDQと元の研究とは異なる関連の仕方を示した。この点については、さらなる追試が必要であろう。この尺度について、上記以外の今後の課題としては、対象年齢の拡大可能性の検討が挙げられる。現時点でJPSSは幼児期の子どもを持つ保護者のみを対象としており、児童期以降に应用可能かどうかはまだ検討できていない。本尺度の項目プールを作成する段階では、養育実践に相当するような具体性が高い項目(例えば、「子どもの意思とは関係なく、習い事や塾に行かせている(伊藤ほか, 2014)³⁾」のような項目)は含めていないため、基本的に児童期の子どもへの関わり方を想定しても回答可能である。ただやはり、例えば、Warmth次元を構成する項目である「時間があるときは、子どもと一緒に遊ぶようにしている」などは、幼児期と児童期で答えが大きく変わる項目かもしれない。そのあたりのことも含め、対象年齢の拡大可能性について今後検討を行っていく必要がある。

引用文献

- 1) Okubo, K., Tang, Y., Lee, J., Endo, T. & Nozawa, S. (2022). Development of the Japanese Parenting Style Scale and examination of its validity and reliability. *Scientific Reports*, *12*, 18099.
- 2) 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田 新・野田 航・辻井正次. (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証. *発達心理学研究*, *25*, 221-231.
- 3) 井淵 知美. (2010). Parenting Scale日本語版の作成および因子構造の検討. *心理学研究*, *81*, 446-452.
- 4) 野寄 茉莉・齋藤 慈子. (2022). 日本語版養育スタイル尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *チャイルド・サイエンス*, *23*, 35-39.
- 5) Hurley, K. D., Huscroft-D'Angelo, J., Trout, A., Griffith, A., & Epstein, M. (2014). Assessing parenting skills and attitudes: A review of the psychometrics of parenting measures. *Journal of Child and Family Studies*, *23*, 812-823.
- 6) Kawabata, Y., Alink, L. R. A., Tseng, W.-L., van IJzendoorn, M. H., & Crick, N. R. (2011). Maternal and paternal parenting styles associated with relational aggression in children and adolescents: A conceptual analysis and meta-analytic review. *Developmental Review*, *31*, 240-278.
- 7) Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, *38*, 581-586.
- 8) Robinson, C. C., Mandleco, B., Olsen, S. F., & Hart, C. H. (1995). Authoritative, authoritarian, and permissive parenting practices: Development of a new measure. *Psychological Reports*, *77*, 819-830.
- 9) Arnold, D. S., O'Leary, S. G., Wolff, L. S., & Acker, M. M. (1993). The Parenting Scale: A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, *5*, 137-144.
- 10) Darling, N., & Steinberg, L. (1993). Parenting style as context: An integrative model. *Psychological Bulletin*, *113*, 487-496.